

よしつねせんぼんぎくら

義経千本桜

〔解説〕竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっております。

〔あらすじ〕

序 段 義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣（いんぜん）が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であった事、初音の鼓の事を詰問します。義経は申し開きをしますが、正妻の君が平家一門の時忠の娘であるということに対しては返答に窮するのです。卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切った事により全ては水の泡となり、義経は都を落ちていったのです。

二段目 義経は、あとを慕ってきた愛妾静御前（しずかごぜん）を折良く来合わせた家臣佐藤忠信に託して、九州へと落ち延びるため大物浦（だいものうら）渡海屋銀平宅で船出を待ちます。やがて船出した一行に銀平に扮していた平知盛が襲いかかります。綿密な計画に従っての行動であったはずが、ふと気づくと事態はいつの間にか壇ノ浦の合戦の再現になっていたのでした。全てが徒労に終わった事を悟った知盛は、守り通してきた安徳帝を義経に託し、碇を背負って海へと飛び込み、壮絶な最期を遂げます。

三段目 維盛の妻子、若葉の内侍(ないし)と若君六代君(ろくだいきみ)は、主馬小金吾(しゆめのこきん)この供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいました。

〔小金吾討死の段〕内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死してしまいますが、そこへ通りかかった鮎屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切って持ち帰ります。

〔すしやの段〕弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であったため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮎屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入った鮎桶を出しますが、その中に会ったのは権太が母親から騙し取った金でした。そこへ権太が首の入った鮎桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。しかし、権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であったと父に告げるのでした。そこへ現れた維盛が梶原の置いていった羽織を裂くと、中から袈裟衣が現れて、実は頼朝もかつて重盛に助けられた恩返しに、維盛を助けるつもりであったことが判るのでした。

四段目 吉野の河連法眼(かわつらほうげん)の館に匿われている義経のもとへ国元に帰っていた佐藤忠信が尋ねて来ますが、そこへ静御前の供をしたもう一人の佐藤忠信が現れます。不審に思った義経が静御前に詮議させると、実は初音の鼓の皮に張られた狐の子が、親を慕って忠信に姿を変えていたことが判ります。義経から鼓を与えられた子狐は、責めてくる教盛を狐の力で散々悩ませて義経の恩に報いるのでした。

五段目 頼朝と義経の仲を裂こうとした藤原朝方は教経に討たれ、忠信もまた教経を討って八島の戦いでこの兄の敵を取ります。

小金吾討死の段

諸共立ち帰る。せきよう夕陽西へ入る折から、主馬の小金

吾武里は上市村にて朝方が追手の人数にんずに取り巻

かれ、数ヶ所の疵を負ひながら内侍若君御供申し、

ひとまづ都へ立ち帰るを、後に続いて数百人、遁

さぬやらぬと追駆けたり。手傷は負えども気は鉄

石の武里が死物狂いと思ひの刃、ここに三人かし

こに七人ばらり／＼となぎ倒し、その身は秋の花

紅葉敵は木の葉のその後へ、追つ手の大将猪熊大

之進遅ればせに駆け来たり

「ヤア、死に損ないめいづくへ行く、先頃嵯峨の

奥にて取り逃がし、主人朝方のご機嫌もつての外、

すご／＼館へ帰られず、庵坊主めに白状させ付け

回したるこの海道、サア、維盛の御台若君を渡し、

腹かつ捌け」

と呼ばわったり、手負いは流るる血汐をぐつと一

飲み息を継ぎ

「主馬の判官が倅、小金吾武里、息ある中はいっ

かな／＼」

「ヲ、その一言が絶命」

と踊りかかって打つ太刀をちようど受け止めは

つしと跳ね、ひらりと見せてはくるりと外し、手

練を尽くせどさすがは手負い、内侍若君あぶ／＼

ひや／＼、小石を拾い砂打ちつけ、及び越しなる

加勢も念力。手強く見える猪熊が眼に入つて目あ

ては暗闇、隙間に切り込む段平に眉間の割られて

ずでんどう、乗つかかるを下よりも突く、切先は

あばら骨、金吾ものつけに反り返る、あなたが起

きれば石つぶて、猪熊斬られ小金吾も共に深手の

四苦八苦修羅の巷ぞ危けれ。忠義の天性小金吾が難なく相手を取って抑え、ぐつと突つ込むとどめの刀

「サア仕負せし、嬉しや」

と、思ふ心のたるみにや、『うん』とその身も倒れ伏す。

「ノウ悲しや」

と内侍、若君、いたはり抱かかへ抱き起こし、

「コレノウ金吾／＼いのふ、気をはつきりと持つてたも。そなたが死んで自らやこの子は何となるものぞ。情なや悲しや」

と泣き入り給ふ御声の、耳に通つて顔をふり上げ、

「才、内侍様、六代様、諦めて下さりませ。心は弥や猛たけにはやれども、もふ叶はぬ。コレ申し若君

様、今いま際に金吾いまわめが申すこと、ようお聞き遊ばせ

や。わが君維盛様は兼ねて御出家の御望み。熊野

浦にて逢ひ奉りしと言ふ者ある故、高野山へと志

し御二方をお供したれど、なかなかこの傷では一

足も行かれず。お前様は、御台様を伴ひ神谷の宿

といふ所に内侍様を残し置き、人を頼んで山へ登

り、と、様のお名は言はれぬ、今道心の御出家と、

尋ねてお逢い遊ばせ。西も東も敵の中、平家の御

公達と悟られぬ様、お命めでたう御成人の後、憚

りながら金吾めが事思し召し出されなば、一滴の

水一枝の花、それが即ち冥途へ御知行、御成長待

つてをります。チエ、お名残り惜しいお別れ」

と、言ふもせつなき息づかひ、六代君は取り縋り、

「死んでくれな小金吾。そちが死ぬると父様に逢

ふ事がならぬは」

と、泣き入り給へば内侍はせき上げ、

「あれ聞いてたも子心でも、そなた一人を力にする。維盛様に逢ふまでは、死ぬまいぞ〜と、なぜ思ふてはたもらぬ。御一門残らず亡び、広い世界を敵に持ち、いつまで存ながらへ居られふぞ。共に殺してたもいの」

と嘆き給へばこぼ理りと、手負はいとど涙にくれ、

「先君小松の重盛様は日本の聖人、若君はその孫君。諸神諸菩薩の恵みのない事はござりますまい。末頼みに思し召して、必ず短気をお出しなされな。アレ〜向ふへ提灯の火影、又も追手の来るも知れず、若様伴ひこの場を早く〜」

「イヤ〜、深手のそなたを見捨て置き、いづくを当てに行くもものぞ。死なば共に」と座し給えば、

「チエ、腑甲斐ない。六代様は大事にないか、こ

の傷で死ぬる金吾めではござりませぬ。聞き入れなければすぐに切腹」

「ア、コレ待つてたも。それ程にまで思やるなら、成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや」

「お氣遣ひ遊ばすな。運に叶ひ後より参ろ」
「必ず待つてゐるぞや」

と、言ふ間に近づく提灯の、火影に恐れぜ是非くも、若君連れて落ち給ふ、御心根のいたはしき。手負は御後見送り〜、

「死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借つても、なんのこの傷で生きられませふ。内侍様、六代様、これがこの世のお別れでござります」

と、思ふ心も断末魔、知死期も六つの暮過ぎて、朝あしたの露と消へにける。

程なく来たる提灯はこの村の五人組、何やらざわ

く話し合ひ、山坂の別れ途に庄屋作が立ち留まり、

「コレ弥助の弥左衛門殿、貴様は鮎商売ゆえ、念押す上に押しかける。今言ひ付けた鎌倉の侍は聞き及んだ蚰蜒げぢげぢ。何やらこなたの耳をねぶつてはげる程言ひ付けたら、『畏つたく』と、滅多無性に請け合ふが、なんとアリヤマア、覚へのあることかや」

「ハテ知れたこと、こなた衆も常からおれが性根を知らぬか。血を分けた俵でも、見限つたら門端も踏まさぬ弥左衛門、膝ぶしが砕けても、畏つたら痺しびりも切らさぬ。したが後からの言ひ付けがもつけの幸ひ、嵯峨の奥から逃げて来た子連れれた女と大前髪、この村へ入り込んだと追手からの知らせ。ところで蚰殿げぢがねぶりかけて、捕へたら褒

美とある。コリヤまた格別よい仕事、皆も油断をせまいぞや」

「オ、ソレく、こんな時こなたの息子の、いがみの権太郎さんを頼んで置かふ」と五人組、山道行けば弥左衛門、坂へ下りしも行く先の、手負にばったり行き当たり、『ハッ』と飛び退き気味悪ながら、提灯振り上げそろく立ち寄り、

「テモマアむごたらしう切つたはく。旅人そふなが、追剥おいはぎの仕業しわざならば丸裸にしそふなもの。路銀を当てに悪者の仕業か」

と、悪い子を持つ親の身は、案じ過して、

「コレく手負殿く」

と、呼ぶも答へもなき骸からに、

「さてはもはや息絶えたか。いとしやいづくの人

なるぞ。見ればふけた角前髪。袖振り合ふも他生の縁。南無阿弥陀仏くくく」

と回向して、『とかく浮き世は老少不定、哀れを見るも仏の異見。人は歪いまがず真直ぐに、後生ごじょうの種が大事ぞ』と、思ひ続けて行き過ぎしが、何思いけん立ち止り、取つゝ置いつの俄かの思案。そろくく立ち戻り、あたりを見回しくくて、抜身を拾い取るより早く死に首はっしと打ち落とすし、提灯吹き消し首引つさげ、忝いと弥左衛門すぐなる道も横飛びに、わが家をさして

すしやの段

神ならず仏ならねばそれぞとも知らぬ道をば行き迷ふ、若葉の内侍ないしは若君を宿ある方へ預け置き、『手負のことも頼まん』と思ひ寄る身も縁の端、この家を見かけ戸を打ち叩き、

「一夜の宿」

と乞ひ給へば、維盛はよい退きしほと表の方、叩くとほそ 枢とほそに声を寄せ、

「この内は鮓商売、宿屋ではござらぬ」

と、愛想のないが愛想となり。

「イヤこれ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜」と宣ふにぞ、

「断り言ふて帰さん」

と戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、『ハ

ツ』と戸を鎖さし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ／＼立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢ていの体、表に内侍は不思議の思ひ、

「今のはどふやらわが夫つまに、似たと思へど形容なりかたち、つむりも青き下男しもおのこ、よもや」

と思ひ給ふ内、戸を押し開いて維盛卿、

「若葉の内侍か、六代か」

と、宣ふ声に、

「ヒヤア、さてはわが夫」

「父様か」

「ノウなつかしや」

と取り継り、詞はなくて三人は、泣くより他の事ぞなき。

「まづまづ内へ」

と密かに伴ひ、

「今宵は取り分け都の事、思ひ暮してゐたりしが、親子共に息災で不思議の対面、さりながら某この家にゐる事を、誰が知らせしぞ殊にまた、遙々の旅の空、供連れぬも心得ず」

と、尋ね給へば若葉の君、

「都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門残らず討死と聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてばかり暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ者のある故に、小金吾召し連れお行方を心ざす道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中将維盛様がこのお姿は何事ぞ。袖のないこの羽織に、このおつむりは」

と取り付いて、咽び絶へ入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みてぞおは

します。涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、

「若い女中の寝入端、殊に枕も二つあり、定めてお伽の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の事も思し召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給ふは胴慾」

と恨み給へば、

「ホ、オそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐れあり。わけてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じと、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情け。何がな一礼返礼と思ふ折柄娘の恋路、つれなく言はゞ過ちあらん。かへつて恩が仇なりと、仮の契りは結べども、女は嫉妬に大事も洩すと、弥左衛門にも口留して、わが身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りし」

と、語り給へば伏したる娘、堪へ兼ねしか声上げて、
『わつ』とばかりに泣き出す。

「コハなに故」

と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば、

「ノウこれお待ち下され」

と、内侍と共にお里は駆け寄り、

「まづ〜これへ」

と内侍若君上座へ直し、

「私は里と申してこの家の娘。いたづら者憎い奴と、
思し召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色珍しい草
中へ、絵にある様な殿御のお出で、維盛様とは露知
らず女の浅い心から、可愛らしいいとらしいと思
ひ染めたが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも
知らして下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、

雲居に近き御方へ、鮎屋の娘が惚れられふか。一生

連れ添ふ殿御ぢやと、思ひ込んであるものを、二世

の固めは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ない

お情に預かりました」

とどうど伏し、身を震はして泣きければ。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。